

『三国遺事』に現れる夢

- その (3) -

曹 述 燮

On the Tales of Dreams in SAMGUKYUSA
- Part III -

JO, Sulseob

『三国遺事』に現れる夢——その(1)^{註1}では、『三国遺事』に載っている“夢”をストーリー展開のモチーフにしている三十の説話を取りあげ作品中に描写された夢の性質の一端を単純に類型分類化することで、当時の人々が“夢”をどのように認識していたかに対する理解とした。『三国遺事』に現れる夢——その(2)^{註2}では、上記の論で類型分類化した項目中の夢のあり方を分析且つ総合することで、説話中に夢が用いられる所以をたずね各作品理解の補完を図るものとした。

この論では主として『三国遺事』に現れる夢——その(1)の末尾で問題提起していた卷三「塔像」：洛山二大聖：観音・正趣，調信の条^{註3}を取りあげ、その作品の構成と表現における特異性と魅力とを浮き彫りにしこの説話が持つ作品性を追求してみることにする。

1. 「調信の夢」の作品構成

現世の現在の自分としては叶えられない女性への恋の願望が夢の中で叶えられている本物の夢物語「調信の夢」。これが韓国における優れた“夢の文学”の一条であることは多くの学者や研究者によって繰り返し指摘されまた評価される^{註4}ところである。周知のとおりある作品が優れたものとして評価される時にはその評価が高ければ高い分だけその作品を囲んでの鑑賞法と分析法は多岐にわたりえ、その実「調信の夢」も作品成立の時期、構造分析、夢の受容様相とその意味などの個別研究、そしてその作品を取り囲んでの影響の授受関係、思想史的背景、文学史上の意義などの比較・対照研究などが様々な角度から様々な観点でなされ多様さを見せている。ところで「調信の夢」の研究の履歴がこれほどの多様さを見せているにもかかわらずなぜかこの作品が載っている『三国遺事』での夢モチーフのその他の作品との比較・対照による作品性の究明はなされていない。このような研究履歴をもたらした最大の

原因はおそらく「調信の夢」の作品性が『三国遺事』での夢モチーフのその他の作品に比べてあまりにも画然とした差を見せているがために、あえてそれらの作品を同時に取りあげて比較・対照して論ずるということが憚られたからではないだろうか。しかしここではそのような比較・対照が「調信の夢」の作品性をより正確に把握するにあたって何より有効な手段であると考えあえてその方法を取る。

ではここで「調信の夢」が夢をストーリー展開のモチーフにしていながら『三国遺事』での夢モチーフのその他の作品とは一線を画して異彩を放つ構成上の特異性を具体的に取りあげてみることにしよう。

1) 「調信の夢」の空間構成

夢語りには当然のことながらこの現実世界とは区分される夢の中の世界があり、夢の中の世界とは入夢と覚夢を境に入夢した瞬間から覚夢する瞬間にいたるまでの世界のことである。ところが人間界における現実世界が論理性と合理性を尊重しその大概が物理的な因果関係によって保持されていることに対し、この夢の中の世界は往々にして現実世界のような物理的因果関係だけでは保持されない。それには非論理性と非合理性が公然と存在しえ、ある意味では夢の中の世界のこのような性質が現実世界とは断絶した別世界としての夢の中の世界を認識させ、その結果現実世界で論理と合理によって解決できない多くの問題を夢の中の世界で解決しようとしたり、あるいは夢の中の世界の出来事を解釈することで現実世界のことを探ろうとする試みもなされる。『三国遺事』での夢モチーフの説話の多くが夢を他界との交通場とし、夢に超空間性を認めて作品展開をみせているのも夢の上記のような性質にもとづくがためである。

ところで「調信の夢」における夢の中の世界は如何なる顛末になっているのであろう。先ず入夢部を見ればそれは以下のとおりである。

入夢部：(調信は)また堂の前に行き、大悲の自分の意を成就してくれなかったことを怨み一日中悲しみ泣いた。精神は疲れ果てしばらくうとうとしたが、突然夢に金氏の娘がゆったりと門に入り、なんと清々しく微笑みながら話しかけていう。・・・(又往堂前怨大悲之不遂已。哀泣至日暮。情思倦憊。俄成仮寝。忽夢金氏娘。容予入門。燦然啓齒而謂曰・・・)。

太守の金昕公の娘が好きになった調信が彼女と結ばれることを当時靈驗あらたかであると評判のたった洛山の大悲の前に祈願して数年。それにもかかわらずとうとう彼女には別の配偶者が決まってしまう、そのことで調信は大悲を怨み一日中泣き悲しんで疲れ果てしばらくうとうとするという現実世界に対して、その恋慕して止まなかった金氏の娘が夢にさっと現れ調信に声をかけることで夢の中の世界が展開している。自分もかつてから調信を恋慕して

止まなくお互いは長い間相思相愛の関係であったと告白しこれからは夫婦になろうと誘う金氏。そこで二人は夢の中で五十年の歳月をともに送るのである。次はその覚夢部である。

覚夢部：調信はこれを聞いて大いに喜んでそれぞれ二兎ずつ分担して別れようとした。その時女は「わたしは故郷に向かいます。君はその南のほうに向かってください」といった。ちょうど別れて道を進もうとするところで目が覚めた。薄い灯火が翳っており、夜の色がたけなわになろうとする（信聞之大喜。各分二兎将行。女曰。我向桑梓。君其南矣。方分手進途而形開。残灯翳吐。夜色将闌）。

夢の中での五十年という長い歳月をともに送る二人。その始めの四十年は現実世界ではそれほど強い恋慕の念を抱きながらも互いが結ばれなかったことに対する反動としての愛の強さと愛しさとが含蓄されているのであろうか。「調信はそれで（これから夫婦になろうと誘う金氏の娘の言葉で）とても喜び一緒にふるさとに帰って行き四十年の歳月の間生計をともにした（信乃顔喜。同帰郷里。計活四十余霜）」という一言の短い表現として処理されている。しかし長い歳月の人生にはそれに見合う多様な出来事が起こりえるもの。それを集約している象徴的事件が晩年の二人を襲った貧困に因る危難とその体験がもたらす人生観とも表現できる恋愛観の変化である。五人の子宝に恵まれたがその貧しさは「家はただ四方の壁しかない（家徒四壁）」有り様。四方に食物を乞うて生き延びること十年。その間の長男の餓死及び物乞いに出かけた娘の村の猛犬に咬まれ倒れる事件など。それによって二人はついに別れを決行し、その段階で夢の中の世界が幕を閉じる。

さて、ここに描写されている現実世界と夢の中の世界とにおける空間の対照であるが、双方は全く同質のもので如何なる相違点も見せなく、そのためこの作品に接する者たちにいささかの違和感も持たせない。現実世界から夢の中の世界に導入される入夢の瞬間も夢の中の世界から現実世界に回帰する覚夢の瞬間もはっきりすることで現実世界と夢の中の世界とが画然と区分はできるが、両方の世界の空間はいずれもただ単に現実世界の日常で会える人物がいつもと変わらない姿をして登場し純粋な人間世での営みに徹する論理性と合理性とを保持している形での現実世界の続きそのものなのである。つまりこの作品の中に構成された夢の中の世界の空間は何かの神秘的な力が及んでいる世界、あるいは誰か人間以外の霊的な存在の出現が見られる世界などの夢語りという点において期待される異空間の存在あるいは異空間との交通などの超空間的モチーフが存在しない。その空間はあくまでも人間世に限定され、その空間での出来事も現実世界の空間の続きとなるのみである。この点から見て「調信の夢」は、『三国遺事』に現れる夢——その（1）の論中の他界との交通場（1）・（2）の中で取りあげられている説話が例外なく人間世以外の世界からの存在が来る、語る、臨むのあり方で夢を他界との交通場として認識していた当時人の夢語り中の夢とは明らかに異なる意

識で作品が構想されているといえる。

2) 「調信の夢」の時間構成

過去・現在・未来と連続する現実世界の時間帯上で常に現在を生きる人間にとっての未来とはあくまでも将来に経験可能であるはずの未来でしか存在しえないものである。これに対して『三国遺事』での夢モチーフの説話では夢が通路となっていてまだ知る術のない未来の出来事が兆候あるいは象徴の形で示され現実的には超越できない時間の制約が乗りこえられるという夢の超時間性が認められているが、それらの説話はストーリーの展開に夢の予見性と夢の成就性という不可避的構成要素を持っていた。

ところで「調信の夢」における時間の構成は如何なる顛末になっているのであろう。その詳細を作品中の夢主の調信を中心にしてまとめてみればそれは以下のとおりである。

- ① 入夢以前の現実世界での調信：仏教僧という求道者の身分でありながら俗世間の女への色恋に深刻な困惑ぶりを見せている。
- ② 入夢部。
- ③ 夢の中の世界での調信：心中の色恋の女と結ばれ互いに老いるまでの五十年の歳月をともに送っている。
- ④ 覚夢部。
- ⑤ 覚夢以後の現実世界での調信：夢から目が覚め人間の世に対する意欲を完全に喪失し別人格になっている。

以上から②、④での入夢部と覚夢部を前後して、①、⑤での現実世界に属している夢主の調信と③での夢の中の世界に属している調信とに分けてみるができるが、①での現実世界での調信は確かに将来にだけ経験可能であるはずの五十年間の自分の未来の事象を③での一回のしばらくの夢をとおして先に体験し⑤での現実世界に戻っている。作品のこのような時間の構成とストーリーの展開は一見して調信の見た夢に予見性を付与しそれが詰まるところ彼の見た夢に超時間性が認められるかに見える。しかし上で確認したとおり、『三国遺事』での夢モチーフの説話での夢の超時間性を認めるための判断は作品内部で夢主が夢の中で自分の生きる現在より先の事象を聞くか見るといふ部分——夢の予見性——と、作品内部で夢主が夢の中で聞いたか見たその事象が一定の時間が経過した現世で必ず現実化するという部分——夢の成就性——との両方の持ち合わせによるもので、それらが夢の超時間性が認められる作品群を成り立たせる不可避的構成要素になっていた。そのため「調信の夢」においての夢の超時間性認定の判断もこの見地から確認されるべきであるが、「調信の夢」でのストーリーの展開には夢の予見性らしきものは確かめられても夢の成就性は一向に確かめがたく、

結論を急げばこの作品から夢の超時間性は認められないといえる。ではその詳細を類型分類中で夢の超時間性が認められる典型的項目とされた「現夢」での4条の作品と対照することで確かめてみよう。

① 卷一「紀異」：「太宗春秋公」

宝姫の夢：西岳に登り尿をしたら京城一杯になる。（夢主が一国を経営する貴人になる事象）。

② 卷二「紀異」：「元聖大王」

元聖大王の夢：璞頭を脱ぎ、白い笠を被り、十二弦の琴を持ち、天官寺の井戸の中に入る。（夢主が国王になる事象）。

③ 卷三「塔像」：「黄竜寺九層塔」

阿非知の夢：百済が滅亡する。（夢主の母国である百済が滅亡する事象）。

④ 卷四「義解」：「義湘伝教」

智儼の夢：株の大きな樹木が海東に生じてその枝葉の陰が中国にまで及び、上には鳳凰の巢があって登ってみると一個の摩尼宝珠があって遠くまで光り輝いている。（貴人が海東から中国に至る事象）。

以上が「現夢」項目中の4条の作品で見られる夢の内容とその事象のまとめであるが、①、②、④の条の夢はそれぞれが謎めいた内容になっているところを以後夢判断が可能なものによりその事象が提示されるという形で、③の条の夢だけは記録の簡略によるものか未来に起こる事件そのものがずばり夢の内容になっている形である。ところがこれらの夢はそのいずれもそれぞれの夢が見られた時点より先のつまり未来の事象が予見されているという点、さらに予見されたままの事象がストーリーの展開の上で現実化しているという点において同じパターンになっており、このことから夢の予見性、そして夢の成就性が認められるのである。これらの夢に対して「調信の夢」においての調信の見た夢は自分自身の五十年にわたる未来像で、その歳月を夢の中の世界で短時間中に経験し現実世界にもどるのである。この夢の解釈にあたって人間世の現実においてはあくまでも将来にだけ経験可能であるはずの自分自身の未来の出来事を夢の中の世界でまえもって経験したという点でこの夢にも夢の予見性が認められるとしよう。しかしその後のストーリーの展開の上でその夢が現実化するという夢の成就性は影も形もない。ストーリーはむしろ調信が夢の中の世界を経験することでそれまで堅持していた愛着、欲望などで満ちている自分自身さえ切り捨て別人格として生まれ変わるという展開となっており、これは調信の見た夢の事象が現実化して成就するところかまったくの夢の域にとどまることを証してくれるのである。つまり「調信の夢」での調信の見た夢は現実世界において夢の中の世界での未来体験が挿入されるという時間の逆転による予見性は確かめられても夢の成就性は一向に確かめがたく、説話全体が類型分類中の「現夢」の項

目がその典型となる夢の超時間性が認められる作品群の時間の構成とはそのあり方が異なるのである。これは「調信の夢」における夢が夢を現実世界ではいまだ知る余地のない未来の出来事の見え方を可能にする通路として、さらには夢で予見された事象の現実世界での成就を確かめることにより夢に多大なる神秘性を付加して認識していた当時人の夢語り中の夢とは明らかに異なる認識で受けとめられ作品が構成されていることを物語っているのである。

以上、「調信の夢」に描かれている夢の認識は、『三国遺事』に載っている“夢”をストーリー展開のモチーフにしている三十の説話中、「調信の夢」の条と作中の夢の内容不明の巻五「感通」：「郁面婢念仏西昇」1の条とを除いた二十八の説話中に描写されている夢の認識、すなわち人間界の人間から物理的に移行不可能な他界との交通場、未来の出来事の見え方、あるいは新たに生まれてくる生命に対する兆候・象徴などとしての夢の認識とはその性質を異にしていることが確かめられた。そして「調信の夢」はストーリーの展開において夢が重要要素になってはいるが、その夢のあり方がまた二十八の説話中に描写されている夢のあり方、すなわち夢の超空間性、あるいは夢の超時間性などとしての夢のあり方とは異なっていることが確かめられた。このように「調信の夢」に描写されている夢は『三国遺事』に載っている“夢”をストーリー展開のモチーフにしているその他の作品中の夢とその性質を異にしていること自体その夢の特異性と独自性を語っているものであり、作品構成中のこのような性質が絶えずこの作品に接する者に魅力を与えつづけているといえるであろう。

2. 「調信の夢」の表現

上では「調信の夢」が同じく夢をストーリー展開のモチーフにしているその他の説話とは一線を画して異彩を放つ作品として評価できる構成上の特異性を空間構成と時間構成の見地から対照しながら取りあげてきた。ここではこの作品のさらなる魅力を浮き彫りにする表現上の独自性を素材の奇抜さ、生活の機微、描写のリアリティー、そして語り手のロマンスへの憧憬の側面から探ってみることにする。

1) 素材の奇抜さ

「調信の夢」での夢主である調信は仏門に帰依している僧侶の身分である。人の仏門に帰依するきっかけは様々でありえ調信がみずからの意志により僧侶としての生き方を選択したかどうかは知る余地がないが、少なくとも僧侶という身分は人間世の情感に惑わされながら生きるより仏法の喜びにより生きるべく人間世から望まれている存在である。ところで調信はそのような僧侶でありながらひどく女色に惑わされたまま何年かを過ごすだけでなく、あげくの果ては彼女と結ばれたいという秘かではあるが自分の心からの祈願をかなえてくれな

かった仏を怨み悲しんでいる。

ところで、この説話における調信が僧侶という身分ではない普通の男性であるとするならそれは世の中のどこにでもあるありふれた色恋話の一つになる。しかし調信が僧侶であるからにはこれは禁忌視される僧侶の色恋というレベルでの素材のおもしろさが加担する。僧侶といえども生身の人間。だから人間としての異性に対する関心はごく自然な営みであるといえるが、しかし特別な理由がない限り一般において僧侶生活と女性とのかかわりは好ましいものとされなかった。このことから僧侶生活に女性がかかわってくるとそれはすぐ話題化する。夢モチーフとは関係のない説話であるが、

① 卷三「塔像」：「南白月二聖：努朕夫得・恒恒朴朴」

成仏を願望し妻子のいる人間世を棄て深い谷間に庵を構えた二人の僧侶が夜中にそれぞれの庵をたずねてきた若い娘にどう対処したかがストーリー展開のモチーフとなっている。

② 卷四「義解」：「元暁不羈」

僧侶でありながら街で自分と関係を持つ女を求める歌を歌うことがストーリー展開のモチーフとなっている。

③ 卷五「感通」：「正秀師救氷女」

僧侶でありながら寒さの中でお産をする乞食の女とかわったことがストーリー展開のモチーフとなっている。

の条などはいずれも僧侶と女性とのかかわり方が話題化した説話として『三国遺事』に取りあげられているものである。その中で、①の条での夜中自分の庵を訪ねてきて一晩泊めてくれることを願う娘に向かって、「寺は清浄であることが本領であなたが近づくところではない。行きなさい。ここにはとどまるな（蘭若護浄為務。非爾所取近。行矣。無滞此处）」といひ放って門を閉ざしてしまう朴朴の言葉、そして②の条での僧侶でありながら女性と関係を持った元暁を、「すでに失戒して聡を生んだ。その後は世俗の服に着替え、みずから小姓居士と名のつた（暁既失戒生聡。已後易俗服。自号小姓居士）」とする表現などはいずれも僧侶と女性とがかかわることを否定的に捉えているものである。以上で見るように常識的に僧侶の色恋をタブー視していたその当時に、「調信の夢」ではあえてこのような話題性に富むものを作品の素材として扱っているのである。

2) 生活の機微

「調信の夢」が素材の面において一般にタブー視される僧侶の色恋を扱うことでおもしろさを追求していることは上で見てきたとおりである。ところでその僧侶の懐く色恋は僧侶だけ

らという身分上の理由だけで一般人の懐く色恋とはかけ離れた何かが付加わるあるいは付け加わらなければいけないものであろうか。たとえば何かのことが因縁で俗世間の人間と変わらぬ女性との色恋に落ちてしまった僧侶が一時的に仏弟子としての道から外れる。とはいってもことあるたびに仏の加護を受けるかあるいは仏との関わりによって守られ最後は僧侶としてめでたしめでたしというスタイルのもの。つまり物事すべてが仏教の神々と関連づけられて超人的に処理されるということである。これに対して「調信の夢」で描かれる僧侶の恋はいかにも普通の人々の日常の男女の恋と夫婦の愛情関係における機微が盛りこまれており、その色恋の表現にはいかにも多事多難である人間世の人の生活そのものがリアルで色恋の主人公が僧侶であるという既定事実を乗り越えて話に魅了される仕組みになっている。つまりストーリーの大筋となるのが色恋。その色恋に落ちる張本人が僧侶という身分の調信であるには違いないがその色恋の展開においての彼は還俗した一人のまったくの世間人であり、それが彼の色恋に接する者に切実な現実感を持たせているのである。たとえば、

① 思わぬところでの恋する女性との劇的な結ばれ。

本人は自分の恋が自分だけの片思いであると信じているところだが相手の女性からの意外な告白に誘われる結ばれ。

② 四十年間の夫婦生活と五人の子ども。

僧侶である自分としては夢にも得難いふるさとでの結婚生活と子作り。

③ 家族を襲う貧しさと夫婦の別離。

i. 家はただ四方の壁しかない貧しさ。

あ. 粗末な食物も工面できなく、四方に物乞いをして生き延びる。

い. 十五才の長男の餓死。

う. 十才の女の子の物乞い中での猛犬に咬まれる事故。

ii. 夫婦の別離

婦人の別離宣言とそれを喜んで受け入れる調信等々。

夢の中の世界での話であるとはいえこのような色恋の展開はそのいずれもが世中の凡人の一人一人が営む日常事のようなものである。だからこの話に接する人々はこの色恋の主人公の紆余曲折に満ちた人生に同感を覚えその流れとともに笑い泣くのである。

しかし結局のところ調信は求道者の身でありながら思わぬ色恋に陥ってしまって苦しんでいる境遇。これは調信の生涯という長いスタンスから考えあわせれば今までのみずからの価値観が根こそぎ揺すぶられる最大の危機の瞬間であり、必ずやいい解決策を求めつつぐり抜けなければならない苦難の関門である。これは現のある状態から他のある状態へ移行するための一種の通過儀礼的苦痛・試練であって、このような試練をくぐり抜けることで古い人間から新しい人間へと脱皮できるのである。この作品においての調信は夢の中の世界という

仮ではあるがあまりにも生々しい世間人としての体験がその試練に代替され、その仮の経験が終わるところで今までの名ばかりの僧侶の域から脱しまことの仏の弟子としての求道者の域に属するものになっているのである。

3) 描写のリアリティー

「調信の夢」での表現力は読むものに臨場感を持たせている。それは上で述べてきたとおり、読み手がすでに扱われている素材に対して非常の興味を引かれていること、そしてそのストーリーの展開が人間の日常生活の機微を盛りこんでいることなどに関連しているだろうが、その覚える臨場感にもっとも拍車をかけているのはこの作品のいたるところで輝いている人間の感情描写のリアリティーに求められる。その醍醐味であると感じられる幾つかの描写を摘出してまとめてみれば次のようである。

① 調信の恋する相手の女性からの告白の場面の感情描写。

突然夢に金氏の娘がゆったりと門に入り、なんと清々しく微笑みながら話しかけていう。「わたしはあなた様をちょっとした顔見知りで存じ上げ心に愛しており、しばしの間も忘れられませんでした。父母の命令に従い仕方なく他人に従ったわけです。今は夫婦となることを願ってここに來たのです」と。(忽夢金氏娘。容予入門。燦然啓齒而謂曰。兒早識上人於半面。心乎愛矣。未嘗暫忘。迫於父母之命。強從人矣。今願為同穴之友。故來爾)。

ちょっとしたところであなたに出会った瞬間から恋心を懐くようになりしばしも忘れることのない恋する娘のひたむきの心、当時何よりも尊重されていた社会道德の一つであった親孝行に逆行しないことでしぶしぶではあるが他人に嫁ぐ娘の切ない心、でも夢の中でだけでも心からの情人と一緒にいることを願って夢路につく娘の愛しい心。これらの心はいずれも一人の人間として生きるに粗忽にできない大事な感情の動きである。しかしこれらの感情は一身に負われているものであるのにもかかわらず同時進行が不可能。だからどちらかの取捨選択をするか少なくとも優先順位を決めざるをえない。このような複雑で且つ難題じみた人生が短い告白の中にびっしり詰め込まれているのである。

② 艱難辛苦の貧しさを経験してからの婦人の別離宣言の場面の感情描写。

婦人はそこで立ち止まって涙を拭い突然語りかけていう。「わたしが始め君にあった時分は、見た目も美しく年も若く衣服もみな新しかった。一口の美食もあなたとそれを分かち得、数尺の暖もあなたとそれをともにした。家を出て五十年、愛しい感情はその上なく恩愛は芳しいばかりで、これを深い縁というでしょう。

しかしこの何年からは衰弱と病魔が日々深まり、飢えと寒さが日々迫ってきます。間借りの住まいも少しの飲み物も人は乞うことを許せず、この家あの家に寄る恥は岡山を背負ったかのように気が重いです。子供が寒く飢えていても、さしあたってどうにか補えることもできない。何の暇に夫婦の心を悦ぶことがありましょう。美しい顔の色気ある微笑みも草の上の露のようなもの、芝蘭の香りのような約束も柳のわたが風に飛ぶようなものです。君にはわたしがいて患いとなり、わたしには君がいて憂いとなる。つくづく考えて見れば、昔日の歓びとはちょうど憂いと思いとのかきかけだったのです。君とわたしがどうしてこのような落ちぶれになってしまったのでしょうか。一群の鳥が一緒に飢えていると、どうして一羽の鸞が鏡に映ることがわかるでしょうか。貧困であれば捨て去り、裕福であれば連れ合うことは人情の耐え難いところである。しかし行うも止むも人間の思いのままではなく、離合にも運命がある。どうかこの言葉に従うことにしましょう」と。(婦乃洪拭涕、倉卒而語曰、予之始遇君也。色美年芳。衣袴稠鮮。一味之甘。得与子分之。数尺之煖。得与子共之。出処五十年。情鐘莫逆。恩愛綢繆。可謂厚縁。自比年来。衰病日益深。飢寒日益迫。傍舍壺漿。人不容乞。千門之耻。重似丘山。兇寒兇飢。未遑計補。何暇有愛悦夫婦之心哉。紅顔巧笑。草上之露。約束芝蘭。柳絮飄風。君有我而為累。我為君而足憂。細思昔日之歡。適為憂患所階。君乎予乎。奚至此極。与其衆鳥之同餓。焉知隻鸞之有鏡。寒棄炎附。情所不堪。然而行止非人。離合有数。請從此辭)。

五人の子供を持つ五十年の長い間の夫婦生活。それには当然のことながらその歳月に比例する様々な出来事があったはずで、それを言葉で言いつくすのは容易なことではないはずである。しかし夫婦生活の末年を襲った貧しさはもうすでに長男の命を奪いさっており、他の家族の命さえ保証できないというほどの凄まじさを見せている。そこで致し方なく夫婦が二人ずつ子供を受けもって別れる決心をする婦人。その婦人が夫に向かい今まさにその別離を口にしているのである。出会い始めの時の溢れんばかりの愛情に満ちた夫婦生活から数えて五十年の歳月。これこそ深い深い因縁によることでしょうか、晩年には体は弱まり生活は窮乏して何処に愛情何かを顧みる暇がありません。時が過ぎれば今の二人はお互いが重荷となっているばかり。むしろこれを機にどうか別れましょうと。良き時の夫婦愛を語る金氏の言葉は美しく愛しい反面彼女の別離を語る言葉は痛ましくて悲しい。だからそれは悲壮なまでに切実でリアルなのである。

4) 語り手のロマンスへの憧憬

「調信の夢」での表現を探る時に、この作品の語り手は人の色恋に対して特別なロマンスを

おぼえていた人物であったと覚えずにはいられない。それは「調信の夢」を語るにあたり、語り手は可能な限りの手を尽くして男女の色恋に興味と注意を引き起こそうとしている痕跡が見られるからである。上で取りあげてきた三つの表現上の独自性以外にそれを物語ってくれるもう一つの証となるものが、かの有名な世紀の色恋話となっている司馬相如と卓文君間の色恋話^註がこの作品の成立に色濃く陰を落としておりと感じられるからである。その実際を列挙してみれば以下のとおりで、まずはストーリー展開における双方の類似性である。

① 色恋の男主人公の境遇。

異郷の地において新しい人生を期待して生きる。

：「司馬相如と卓文君の恋」での司馬相如は依託していた梁孝王が亡くなることで平素仲良くしていた臨邛の県令の王吉に頼り臨邛の官舎での新しい生活を始めており、「調信の夢」での調信は溟州の捺李郡にあった世達寺の莊園の官舎の知莊(莊園の役人)として赴任して新しい生活を始めている。

② 色恋の女主人公の姿。

婚姻歴を持つ女性であっても自分の気に入った男性が目の前に現れた時は躊躇することなく果敢で積極的に自ら相手の元に走る。

：「司馬相如と卓文君の恋」での卓文君は今し方寡婦になったばかりの身で実家にもどっていたが、その実家の父親の卓王孫の設けた宴会に参加した司馬相如に一目惚れしその晩彼と一緒に駆け落ちをしており、「調信の夢」での金氏は父母の言いつけにより致し方なくとはいえよその人に嫁いでいる身であるが夢の中の世界においてだけでも心を許した調信と一緒にになりたいという一心で彼の下を訪ねている。

③ 夫婦生活の始まりの様相。

自分の元に走った女性と早速故郷に戻り同居生活を営む。

：「司馬相如と卓文君の恋」での司馬相如と卓文君は司馬相如の故郷である成都に帰って同居生活に入っており、「調信の夢」での調信と金氏は調信のふるさとに帰って四十年の歳月の間生計をともにしている。

ストーリーの展開には双方がこのような類似点を持ちあわせていることが確かめられる。その次には表現における双方の類似性であるが、両作品上に用いられている貧しさを形容する表現はそれぞれが

「司馬相如と卓文君の恋」：家ただ四壁立つ（家徒四壁立）。(『漢書』卷五十七：「司馬相如伝」)

「調信の夢」：家ただ四壁（家徒四壁）。(『三国遺事』卷三「塔像」：洛山二大聖：観音・正

趣, 調信)

と、いずれにおいても「家にただ四壁」という同様の表現を用いている。周知のとおりこの熟語は人の貧しさの極まりを形容する表現として『漢書』の「司馬相如伝」で始めて用いられたもの。「調信の夢」が調信と金氏の間の末年を襲う貧しさの形容に『漢書』の「司馬相如伝」からのその表現をそのまま踏襲していることから「司馬相如と卓文君の恋」が「調信の夢」に深い陰を落としていることが確かめられる。

以上の「調信の夢」の表現で確かめられるように、「調信の夢」における色恋のロマンスは「司馬相如と卓文君の恋」における世紀的色恋話のロマンスの前例が色濃く影を落とすことでこの作品に接する者にロマンスへの郷愁と憧憬とを同時に懐かせるダブルの効果を発揮しており、これこそ思わずとも「調信の夢」の語り手の人の恋に対しておぼえていたロマンスへの強い憧憬がもたらした結果であるといわざるをえない。そしてこれは「調信の夢」という作品が表面的に調信の僧侶としての新生に主眼をおいているかのように見えてその実は「司馬相如と卓文君の恋」のような男女の色恋の隠微を語りそれを堪能することに多大な関心を払っていることを物語ってくれるものである。

以上、空間構成と時間構成の面においての「調信の夢」の作品構成を、この作品が載っている『三国遺事』での夢モチーフのその他の作品と比較・対照する方法により追求してみた。その結果「調信の夢」に描写されている夢は『三国遺事』に載っている“夢”をストーリー展開のモチーフにしているその他の作品中の夢とその性質を異にしており、作品構成中のこのような独自性は絶えずこの作品に接する者に魅力を与えつづけていることを確かめた。そして作品構成上の独自性以上にさらなる魅力でこの作品に接する者に迫る「調信の夢」における表現力を素材の奇抜さ、生活の機微、描写のリアリティ、語り手のロマンスへの憧憬の四つの項目に分けて追求してみた。このことから「調信の夢」は作品が独自に保つ構成力と表現力で魅力ある作品であり、一歩進んで韓国古代の夢の文学の精髓となる作品であると評価するところである。

注1. 『愛知淑徳大学論集』「文学部篇」第24号所収。1999年、3月。

注2. 『愛知淑徳大学論集』「文化創造学部篇」創刊号所収。2001年、3月。

注3. 以下「調信の夢」と略称し、作品の全貌は『三国遺事』に現れる夢——その(1)の論に譲る。

注4. 以下の原文からの訳は論者による。

- 1) 調信説話はたとえ叙述の始まりがお決まりの表現になっているとしても、全編から見てその特殊な素材と構成は創作の世界に接近したものであるから……。 (車容柱, 「調信説話の比較研究」, 『韓国文化人類学』第2輯, 韓国文化人類学会, 1969年)。
- 2) 我々は人生の無常さを語ろうとする時には決まって“一場の春夢”または中国の故事にもとづく“南柯の一夢”をその例として取りあげる。しかし、この【三国遺事】には、“南柯の一夢”より遙かに優美で深刻な物語が、今日の短編小説以上に仕組まれた構成と、統一圧縮された主題を持って載せられている。(張徳順著, 『韓国古典文学の理解』, 一志社, 1973年)。
- 3) 調信伝は紛れもない新羅時代の作品であり、その創作年代は9世紀後半であると推定される。(池浚模, 「伝奇小説の嚆矢は新羅にある」: 調信伝を解剖する, 『語文学』32, 韓国語文学会, 1975年) など。

注5. 注2の31頁参照。

注6. 拙稿「【三国遺事】に表現された新羅人の孝行観」(『名古屋大学中国語学文学論集』第七輯, 1994年)参照。

注7. 以下「司馬相如と卓文君の恋」と称し、内容は『漢書』の卷五十七、「司馬相如伝」の記事にもとづく。